

大学1年生におすすめする図書10冊

01 『中世動物譚』 P.アンセル・ロビン 著 関本榮一・松田英一訳 博品社

文学作品に登場する動物が一体何を象徴しているのか、疑問に思ったことはないですか？

この本では特にイギリス文学に多く見受けられる動物に関する俗信や空想の記述を解明しています。

まずはなぜ動物が用いられるようになったのかその起源に迫り、そこから哺乳類、幻想の動

物、海の動物、爬虫類、鳥類に分類して、多くの動物についての説明がなされています。

皆さんがよくご存じのイソップ物語にも、たくさんの動物が登場していますよね。この本を読んだ後、もう一度イソップ物語を読み返すと、もっと違う視点で読むことができると思います。

02 『中級ドイツ語のしくみ』 清野智昭著 白水社

ドイツ語学科の学生やドイツ語を第二外国語で履修している学生にお勧めする本です。これは教科書や堅苦しい文法書のような本ではなく、コラムのように一つ一つの文法を短くわかりやすく楽しく解説してくれていて、皆さんが初級で習った、気づかずに用いていた文法の謎を解

き明かしてくれる本です。頭から読まなくとも、興味のある所だけをつまんで読んでもいいと思います。この本を読んだあなたは、ドイツ語の理解と興味がより一層深まり、確かなステップアップにつながることでしょう。

03 『あいづち・つなぎ語辞典』 W J Ball 著, 中田裕二・岸野英治 訳マクミランランゲージハウス

英語での実際の会話や文章で用いられるあいづちやつなぎ語(You know…や接続詞、副詞等)がどのような使われ方をしているのかをまとめた一冊です。

最初はアルファベット順に並んでいますが、後半はそれぞれの表現の概念で分類されており、さら

に理解が深まります。海外映画やドラマでよく耳にする、You know… や I mean…の解釈についても説明がなされています。この著者が使っている「ダミーとしてのつなぎ語」が果たして何なのか。これを理解できれば、あなたの英会話に、よりナチュラルな表現が加えられることと思います。

04 『金曜日のアンナ―不思議なことばの世界へ―』 ハレーネ・ウーリ 著, 福井信子 訳

この本は毎週金曜日にアンナという言語学の学生がベビーシッターとしてとある少年の家にやってきて、言語学について教えてくれます。「外国語」と「借用語」の違い、音と意味内容について、そして我々が無意識のうちに言葉の文法の知識を持っているということなどなど、難しく思われます

が、二人の会話を中心となっているので、とても読みやすい本です。アンナと少年の二人の会話、もっと知りたいという欲を掻き立たせてくれて、我々も少年と一緒に言語学の面白さに引き込まれて行ってしまいます。

05 『考えてみれば不思議なこと』 池内了 著 晶文社

普段素通りしてしまうような物事も考えてみれば不思議だな、とこの本を読んで気づかされます。天文学者の池内先生ですが、科学をもっと身近に感じてほしいと考え、科学と文学を結び合わせようとする試みをまとめたのがこの本です。第一章の60個の「考えてみれば不思議なこと」はすべて2ページずつまとめられていて非常に読みやすく、同時に言葉の表現の多様性にも

面白味を感じさせてくれます。第二章では、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を取り上げ、池内先生の専門である星や宇宙についての話を、この作品と並行して語ってくれています。この作品中で主人公たちが見たものや、宮沢賢治の想像力に関して、池内先生なりの解釈も混じっていてとても面白いです。科学と文学が寄り添う、そういう本をこの本で感じてみませんか。

06 『言語世界地図』 町田健 著 新潮新書

世界に存在する言語の数は7千にも及ぶといわれています。この本では、46の主な言語を取り上げ、その言語の成り立ちや使われている地域、また言語によるアイデンティティの表現についても教えてくれます。ラテン語を起源にもつイタリア語ですが、現代イタリア語の標準語というのは、ローマ語で話されていた方言をもとにしたものではなく、フィレンツェの方言をもとに

なっていることをご存じでしたか？ 例えば日本語の標準語においては、首都の方言をもとにして作られており、誰にでも伝わりやすいという点で標準語は出来上がっていくと考え、地方の方言が標準語になったイタリア語の例は非常に興味深いですね。言語の奥深さ、多様性、面白さに気付ける一冊です。

07 『ドイツ語－語史・語誌－閑話』 石川光庸 著現代書館

この本は、ドイツ語の学習をもっと楽しんでもらえるようなトピックがたくさん積まれており、肩の凝らない雑談のような本です。たとえば初級文法で習った数詞において、10 (zehn)、20 (zwanzig)まではすんなり覚えられますが、30になるといきなり dreizig ではなく、dreißig になることに気づかなくてはなりません。そして、40(vierzig)、50(fünfzig)、でまた-zig の形

に戻ります。なぜ30だけが-Bigになるのか、この現象がまさに、「第二次子音推移」の説明にもってこいの例なのです。まえがきやあとがきで著者が、「通読してもドイツ語の能力が増加するわけではない」と断りを入れていますが、ドイツ語に関する知識は使えなくとも、学習する際のエッセンスになりえると思います。

08 『歴史言語学とドイツ語史』 荻野蔵平, 齋藤治之 著 同学社

ドイツ語の歴史に関心を抱く学生には是非お勧めしたい本です。ゲルマン語時代から現代ドイツ語に至るまでの時代、「ゲルマン語」、「古高ドイツ語」、「中高ドイツ語」、「古低ドイツ語・中低ドイツ語」、「初期新高ドイツ語」、「新高ドイツ語」、「現代ドイツ語」というように時代区分されて、各時代の時代背景から詳しく述べられ、その時代のドイツ語を調べるうえで用いられた資料や、言語的特徴などの説明がなされています。「第

一部:歴史言語学」と「第二部:ドイツ語史」と二部構成になっているので、最初から読まなくとも、第二部のドイツ語史から読み、言語変化の仕組みを第一部の歴史言語学で確かめるという方法でも活用できます。卒業論文の参考文献としても役に立つ本で、この本の参考文献についても所々で紹介があるので、またそういう本を手にとってみて研究してみてください。

09 『ドイツ史10講』 坂井榮八郎 著 岩波新書

高校で習った世界史では、表面的なドイツの歴史だけなのだとこの本を読んで痛感しました。ゲルマン世界、神聖ローマ帝国、宗教改革から冷戦後の再統一に至るまでの歴史を、ドイツの視点から語られています。「ヨーロッパのドイツ」がいかなる歴史を歩んできたのか、そんなこと

知らなかったというような内容がたくさん詰め込まれています。むしろ、この本を読んでおけば、世界史をあまり覚えていなくともドイツ史、ヨーロッパ史の知識が満たされるだろうと思います。

10 『漢字—生い立ちとその背景—』 白川静 著 岩波書店

古代では、ヒエログリフや楔形文字をはじめたくさんの象形文字が生まれましたが、ほとんどの文字が比較的早い時期に滅んでいきました。ただ漢字だけが今なお生き残っていて、この著者は、「この文字の背後に文字以前の計り知れぬ悠遠なことばの時代の記憶が隠されているのならば、漢字の体系はこの文化圏における人類の歩みを貫いて、その歴史を如実に示す

地層の断面であるといえよう」と述べています。内容は専門的で難しいですが、漢字の成立した風土的、文化的背景を明らかにしようと試みています。大昔の中国に住んでいた人々の生活や、宗教、神話にも攻め入って説明がなされていて、漢字が神秘的に思えてきます。文字の起源に興味を持った方はぜひこの本も読んでみてください。

2020.8.1